

令和4年度第1回大分県総合教育会議 議事要旨

【日程】

日時 令和4年6月7日(火)

開会 10時30分 閉会 12時00分

場所 県庁本館4階 第一応接室

【出席者】

総合教育会議構成員 大分県知事 広瀬勝貞
大分県教育長 岡本天津男
大分県教育委員 林浩昭
大分県教育委員 岩崎哲朗
大分県教育委員 高橋幹雄
大分県教育委員 鈴木恵
大分県教育委員 岩武茂代

【協議事項】

- (1) 高等学校のさらなる魅力化・特色化に向けた取組について
- (2) 子どもをめぐる諸課題について
 - ① ヤングケアラーへの支援について
 - ② 不読率の改善について

【議事要旨】

協議事項（１）高等学校のさらなる魅力化・特色化に向けた取組について

○高校教育課長 （資料に沿って説明）

○広瀬知事 皆さんからご質問、ご意見があれば。

○林委員 私、出身は国東なんですけれども。国東高校は定員割れで厳しいが、今回宇宙コースとか、色々話題になっていて、地元は盛り上がっている。最近、コロナの影響でいろいろな遠隔授業や通信を使った授業ができるということで、私たちの頃は塾も無くて、大変厳しかったんですが、今は別に国東にいても、東京、大分市にいて授業を受けるのとほとんど同じ事ができる。ただ、まだそういう情報革新が起こっているということをなかなか地域の人たちが実感できていない。そこまでなっているのかなということに不安を持っているところがある。そういう意味では、地域を深く学んでそこに残ることと、難関大学に行くような人材を育てたいという地域の両方の要望に答えるような時期にきていると思います。何処の高校も同じような先生を配置しているとのことなので、それを中学生やその保護者、地域の方が理解して、地域の高校の魅力をつくっていく時期にきているということで、私は非常に明るい未来を想像しています。

○広瀬知事 国東高校に、宇宙コースを設けたのは面白いんだけど、先生はいるの？

○高校教育課長 現在、どういった大学と連携できるかを、コーディネーターを配備しながら考えているところです。そういった外部人材を積極的に活用する必要があると考えています。

○広瀬知事 この間、別府にセミナーで来ていた中須賀先生みたいな方を。そうでないと、ただの便乗ということになっちゃうから。

○林委員 地元の期待は大きい。地域の魅力を理解して育てていくのは大事で、戻ってくる動機にもなりますし、それらを両立できる勉強が大事だと思います。

○広瀬知事 優等生は、宇宙に行かせてあげると。

○高橋委員 大分はおんせん県おおいたじゃないですか。APUには観光科があって、卒業生が箱根湯本の観光協会で働いているんですよね。例えば、高校に観光に特化したような、おもてなし観光科とかを作って、コロナが終わった後にお客さんがくるように、地元の企業や地元の人たちと上手くコミュニケーションを取りながら、いい人材を大分に残していく。全てが進学する生徒ではないので、そういう子どもたちには大分の魅力をもっと発信してくれるような、そういう科も必要ではないかと。それは普通科でも出来るという話はしていたんですが。

○広瀬知事 観光科はどうです？由布高校にあるよね？

○高校教育課長 由布高校の中に観光コースを作っています。

○広瀬知事 コースと科はどう違うの？

○高校教育課長 科は、学級単位として、文科省の大きなくくりがあるんですけども、普通科であるとか、工業科であるとか農業科であるとか。その普通科の中に、県がコースを設置している状況です。今後、普通科改革の話がありまして、普通科を地域と連携した学びを探究していくことを主とする学科であるとか、あるいは学際的な、大学と連携した学びを中心とした学科など色々と工夫して設置していいですよという中教審答申がありました。どういった可能性があるかがビジョン検討委員会での話になってくると思います。

○岡本教育長 ビジョンとは少し離れた話になるんですが、今年度の新しい話で、湯布院の若手経営者の「彩岳館」や「樹」といった、福岡の不動産会社さんで大きい旅館を3つ4つ取得されている方がいます。やる気のある高校出の人を受け入れたいというお気持ちをもたれていらっしゃるので、高校教育課の職員が仲介して、インターンシップをやらせていただきつつ、逆に経営者の考え方を高校生に伝えていただきたいというお願いをしまして、そういった取組を由布高校に加えて、例えば大分商業高校など、商業科の生徒にも採択してもらおうということ

始めようとしています。人手不足は深刻なようですが、あっち行ってこっちへ行ってとシフトも上手く組んでいただいています。

○広瀬知事 APUの観光科はインターコンチネンタル。

○高橋委員 結構繋がりがあって、高校とも連携ができるという話があります。人材活用で、企業がどういう高校生をほしいかコミュニケーションをとろうと教育長にお願いしています。即戦力になる人材、どういう方がほしいか企業から高校生たちにお話する機会ができないかなど。

○広瀬知事 それから、普通科全体のレベルアップ。大分上野丘高校だけが高校じゃ無いと。先生でなくて、生徒がいいんだろと言うが、先生がいいんじゃないのと思うんだけども。

○教育人事課長 教員の異動については、一定の在校年数が経過したら異動するという考え方で、異動する際には、異なる市町村に異動するようにしています。異動の際に、学校長からどういう教員を望んでいるかを聞くが、配置に関してはバランスを考えて配置しています。

○広瀬知事 大分上野丘高校のレベルを落とすという意味では無いけれど、他のところをもっと上げるように。

○教育人事課長 地域の魅力化推進に取り組んでいる学校では、公募制をやっています。学校のこういう人材が欲しいという呼びかけに対して、手を挙げて貰って、学校長が面接して、この教員がぜひ欲しいという回答があれば、それを人事に反映させています。

○広瀬知事 魅力化といえば聞こえはいいが、普通校のレベルアップをサボっている言い訳にしているのでは。

○岩武委員 魅力化というと、普通の学習とは違うことを取り入れることに目が行きがちなんです。普通科の基本は、しっかりした学力を如何にして育てるかということだと思っただけです。だから、学校の特色の第一番は、それぞれの学校の生徒の学力の実態に応じて、その子どもたちをどうやって伸ばすかということですが、学力の育て方の仕組みが、大分上野丘高校と宇佐

高校では違う。大分上野丘高校に集まっている生徒の学力・意欲の実態と宇佐高校の実態は違う。では、どういう風にして学力を育てるのか。やはり宇佐メソッドのようなものが必要だと思うんですね。そういうものを各学校が自校の第一として、学力向上に向けた方法、人間性の育て方を特色としてつくるのが大切だと思います。その上で、次として、地域との連携とか学際的なこととか、実はそれ自体が目的ではなくて、それを通じてどういう力を育てていくのか。そういった課題に取り組むことで育つ思考力や探究力、興味・関心、それは学力や人間性にも結びついていくものだと思います。今、3つのポリシーが言われていて。まずは、ディプロマ・ポリシー、これはどういう風な力を育てていくのか。そのためにどういう勉強をさせるのか、これがカリキュラム・ポリシーですね。そして、どういう生徒を求めていくのかというアドミッション・ポリシー。今、どの大学もこの3つのポリシーをしっかりと公表してやっています。それを今度、高等学校がやっていくことになると思いますので、そういう方針の下で、子どもたちの力をどう上げていくのかということを、地方の学校がしっかりと実践していくことが必要だと思います。私学も頑張ります。

○広瀬知事 盛り上げてください。今、岩武委員がおっしゃったように、特色あると一言で言ってしまうと、普通科を観光科にしてしまう感じになるけれども、そうじゃなくて、普通科のレベルをあげるとか、メソッドを上手く使って普通科のレベルを上げていく、あるいは、商業科などのレベルを上げていくことも大事ですね。そうしないと、大分県は県外から来るばかりと思ったら、県外に行っている人も多いんですよ。

○鈴木委員 三男がこの春高校生になって、大分工業高校に進学しました。朝が、三重総合高校に行く子と同じ時間で間に合います。通常の時間で通学出来ていて、帰りもそんなに遅くならずに部活動に励めていて、楽しいと言っています。上の二人とは違って、特色が色濃く出ています。私は大分市外に住んでいますが、大分市に通えるありがたさ、子どもが自由に通えるあ

りがたさみたいなものを感じています。子どもが進みたい進路を選択できるのは非常にありがたいです。ただ、住んでいる市内の高校が魅力無いかというと、今は、少しずつ定員も戻ってきていて、周りの保護者の方の評価も上がっていて、充分進学も就職も出来るという強みを出してきているので、それぞれの高校が頑張っていると思います。ただ、高校無償化の対象にならない家庭も多く、進学したくても出来ない経済状況にあるお子さんもいて、修学旅行に行けない方もいますし、昼食もきちんと摂れていない生徒もまだいます。すべての子どもが、学力向上して、難関大学に行ける訳ではないので、県全体として底上げをして、きちんと就職が出来たりとか、自分の行きたい進路を実現できるようなサポートをしていかないと。うちは4人中3人が専門学科に行っていて、普通科には行っていないんですけど、上2人は学校推薦で学費半額免除で進学できました。そういう枠があることも高校側がきちんと理解を深めてほしいです。中学校の先生も、高校に通う時に、どういう風に電車に乗って、何分歩くとか知らないんですね。だから、「通うのが大変じゃないか」と最初言われたんです。情報のやりとりがきちんと出来ていない気がしています。私は今、教育委員を務めているので、そんなに通うのは大変じゃ無いか、高校側もこういう取組をしているなど聞ける環境にありますが、知らない先生や保護者もたくさんいると思うので、そこはもう少し風通しを良くしてもらえたらいいと思います。

○広瀬知事 大分工業高校って、卒業生も含めて面倒見がいいですよ。そういう魅力もありますよね。魅力ある学校づくりの一つにね。

○高橋委員 もともと進学校だったところは藩校だったところが多くて、伝統的なものが繋がっている。私は、スクール・ポリシーが大切だと思います。魅力は実際にあったんですけど、先生方は、転勤されて分かっていない方もいらっしゃると思います。私は今、時間がある限り、高校を訪問しています。杵築高校に行ったときに、感動したのが、「十王魂」。明治初期に、

廃藩置県が終わった後、すぐに高校ができて、剣道、柔道、文化的なものも含めて、諸先輩が頑張ってきた成果が写真にも残っていて、すごいんですね。竹田高校もそうだし、藩校があったところはきちんとした教育がなされていて、それを皆さんに伝えるというのが今までの地域性だったと思います。それを新たな特色として、上手く融合していくところから始めないと、歴史があって、今、新しいモノをすぐに取り入れても駄目ではと思います。知事がよくおっしゃっているグローバル人材の輩出ですが、杵築高校の英語の先生の教え方にびっくりしてですね。すごい上手いなと思いました。すごく優秀な先生も地方にいます。教育人事課長が総合的配慮をしてやってくれていると思います。

○広瀬知事 確かにグローバル教育の集会で県内の高校が一同に会しているが、全部の高校から来てますよね。

○高校教育課長 先日、グローバルリーダー育成塾の第1回目を開催し、オンラインでしたが、700名を超えていました。

○林委員 ITができて、どこに居ても同じように。

○広瀬知事 こういうことで魅力をつくるとか、特徴をつくるとか、モデルをいくつも考えてみたら校長先生も分かるんじゃないの？普通校のレベルを上げるメソッドと、特色をつくるメソッドを分けた方がいいよね。

○岩崎委員 普通科のレベルアップ、実は、地域の方々が一番気にされています。人口減の中で、地域が生き残るために、核となる高校が定員割れして廃校になるときのダメージを考えられているんですね。県教育委員会も、地域の力を借りて魅力ある高校をつくろうとこれまで取り組んできましたが、生き残りをかけて目の色が変わってきたように感じます。学校の先生方、校長先生を中心に、いろいろな対策を打ってきました。平成28年から平成30年まで、地域の高校活性化支援事業がありましたし、平成31年から令和2年まで、地域の魅力化事業をやっている

ます。机上配布資料③が、その成果を表していると思うんです。令和2年度と令和3年度を比べると、杵築高校なんかは進学指導体制の工夫で、習熟度別でやってこられて、学校の体制として、全体で方向性ができあがっています。そういったところから、令和3年度、令和4年度の国公立大学合格者数が、56人から72人に増えているなど、こういった成果が、色々な学校でできています。難関大学を全ての学校が目指す訳ではないけれど、それでも、地域の中学生に対して、ここに来れば希望の大学に行けるんだよと発信できるだけの学校に段々なってきたと思います。こういった問題意識は地域の方々のほうが強いような気がします。それに、県教育委員会としても何とか応じることができるようになってきていると思います。

○高校教育課長 ペーパーテストでの学力と、それ以外の探究的な学びによる広い学力観と、両方が当然必要であって、進学指導の体制の強化・工夫というと、どちらかと言えば、ペーパーテストに視点が行きがちだが、SSHも魅力化事業もそうなんです。そういった学びのそれ自体が目的ではなくて、その先の自己実現でこういう成果が上がっているということは、いわゆる新しい学力観に基づくこういった学びも必要になってくると思います。これが地域の学校の進学実績の向上のメソッドに活用できるのではないかと考えます。

○岡本教育長 実際に、こういう形で実績が上がれば、SNSなどを使って周知してほしいと各校長にはお願いしています。地域の方々が自分の地域の高校に行けばどこに進学できるといったお話ですとか。特にお願いしているのが、生徒の生の声を出すことです。この高校に行って、こんな楽しい経験ができたという声を、先生ではなくて生徒に発信させてほしいというお願いをしています。地域の学校の認知度をもっと上げないといけないと思っています。

○岩崎委員 大分上野丘高校に良い先生ばかり集めているのではないかとの話だったが、大分上野丘高校から地方の高校に先生が散っていきます。元々、全県一区ですから、大分上野丘高校のこれまでの進学状況から、将来を考えて、良い生徒が大分上野丘高校に集中するのはやむ

を得ない部分があるんですね。その中で、大分上野丘高校で授業を担当された先生方が、技術を持って色々なところに行くのは、成果に結びつくと思います。先生方のやる気を管理職の方々が引き出すというのが、良い体験になっていると思います。能力のある先生方を色々な学校に配置して貰っているんで、成果が出ているんじゃないかなと思います。

○広瀬知事 今日、大変貴重なお話を伺えましたので、教育委員会のほうでも、どういうタイプの学校をつくっていくのか。もう一つ、聞きたいのは、名物先生の講義をインターネットで大分県の生徒さんが聞けるとか、そうすると、天才の目が日田で開かれるとか。そういうことはないのかということ。

○高校教育課長 他県の教員の授業を、などはやっていないんですけども、大学の先生の授業などはあります。県立高校には一つのモデルとして指導教諭も入れていきますので、オンラインでやるかどうかは別として、そういった先生を核としてそれ以外の先生方の指導力向上には努めています。

○広瀬知事 そういったことも含めて検討して下さい。ありがとうございます。続いて、子どもをめぐる諸課題に入る前にまずは、学校教育の成果から。説明をお願いします。

○教育改革・企画課長（資料に沿って説明）

○広瀬知事 本当に、学力・体力で頑張っていて、成果をあげてもらいました。大分方式ということで、黒板の書き方から勉強していただいて、この努力が成果につながったと思います。これについて何かありますか？

○林委員 現場の先生も生徒も一緒になって頑張ってきました。やり方は間違っていなかったと思っておりますが、これからどうするか。これを維持するだけでなく、さらに上を目指すようにやっていかなくてはと思っています。

○広瀬知事 ありがとうございます。引き続き、気を引き締めて頑張ってください。

協議事項（２）子どもをめぐる諸課題：①ヤングケアラーへの支援について

○こども・家庭支援課長（資料に沿って説明）

○広瀬知事 既存制度を活用した支援メニューの紹介ということだが、既存制度で支援は十分と
いうか、支援は出来ると考えられますか？こういうのが足りないというのはありますか？

○こども・家庭支援課長 資料の右下に行政福祉サービス等の支援メニューがあります。この中
で、介護・障害ヘルパーとありますけれども、親御さんの介護が必要であればヘルパーは使え
るんですが、子どもさんへの支援は出来ません。子どもさんのご飯を作ることも、洗濯もでき
ません。今年度から、厚労省が家庭養育のヘルパー制度を創りましたが、これから市町村に実
施していただくということで、まだ整ってはいない状況です。また、課題が複雑で多岐にわた
り、処遇困難な事案が多いかと思えます。その場合は、虐待対応と同じように、要保護児童対
策地域協議会で、複雑に絡み合った問題をどうしていくかということに関係者で協議してい
くことが必要だと考えております。

○広瀬知事 今度こども家庭庁ができますよね。できたらどうなりますか？

○こども・家庭支援課長 そちらに業務が移管することになります。

○広瀬知事 例えば、学校現場でヤングケアラーを最初に発見できるよね？それをどうする？

○こども・家庭支援課長 現在も厚労省と文科省は連携しており、文科省からも、教育委員会を
通じて、学校にヤングケアラーへの支援のための通知を出しています。

○広瀬知事 隙間ができることはないわけですね。

○こども・家庭支援課長 国においても連携し、同じように、県も知事部局と教育委員会で連携
しつつ、現場で一緒に考えていくということになろうかと思えます。

○広瀬知事 制度の出来たては危ないから、よく見ておいてください。皆さん、これについて何
でもどうぞ。

○鈴木委員 相談窓口の設置ということで、専用の電話での対応とありますが、今、固定電話を設置している家庭はかなり少なく、「加入していない」と周りの保護者からもよく聞きます。なかなか、お子さんの方から電話をするのはハードルが高いのではないかと思います。子どもの同級生でヤングケアラーである状況が小学校3年生くらいから始まって、家事が夜中までかかり、朝起きるのが遅くなって学校に来られないとか、習い事の送迎をしてもらえないとか、保護者の体調が悪く、下の子の面倒をみないといけないなど、学校生活に支障が出てしまう状況があると聞きました。校長先生とも相談しましたが、ご家庭が福祉に繋ぐのを嫌がって支援を受けようとしないう状況になっているとのことでした。福祉サービスがあっても、実際には受けられない家庭があると思います。それで、子どもが育てられないと判断されると、隔離されてしまうかもしれないので、なかなか、そこに踏み出せない家庭もかなりあると思いますし、実際に長男や次男の友達でも、そういうご家庭がありました。自分で、食事を作らないといけなくて、お弁当が作れないから、お昼にお弁当なしで学校に来ていたり、洗濯もしたりしなかったりで、学校が家庭と話をしようと思っても、なかなか上手く出来ない場合があると思います。福祉からも直接家庭に入れないう状況もあると思うので、私はこの数字より遙かに多くの子どもたちが困っている状況があると思います。もう少し、スクールソーシャルワーカーや、スクールカウンセラーに SOS を発信出来て、学校と地域や福祉がきちんと支援できる体制を作らないと、この問題は解決できないのではないかと思います。現状、厳しいご家庭がたくさんあって、そういうお話ってなかなか出てこなくて、本当に進路を絶たれてしまうお子さんもいます。学校を途中で辞めなければならないとか。実は、表面にでていないだけで大分県内にもたくさんあると思うので、もう少し、踏み込んだ調査が出来ないでしょうか。今、コロナで家庭訪問も出来なくなって、家庭の様子が伝わりにくかったり、保護者の方が「もう来ないでください。」とお断りする場合もあって、家庭の状況を先生たちが知らない場合もかなりある

と思います。一步踏み込んだ支援を、必要としている家庭にはしていただきたいと思います。

○岩武委員 実際には、ヤングケアラーに気づいたときに行政と結びつくのではなく、日常的に学校と福祉関係や子育て関係の課が結びつくことが必要だと思っています。というのも、豊後高田に勤務していた時に、このヤングケアラーの問題だけでなく、家庭に支援が必要な子どもさんや、子どもさん自身に支援が必要な場合、幼児のときから把握していて、小・中・高と繋いでいました。高田高校においても、赴任したらすぐに担当課の方が来て、こういう子どもさんが支援の対象になっていると話をしてくれました。その後も一月に一回、学校に訪問してくれていましたので、その後もずっと情報交換が出来ていました。そうすると、何か問題を学校で発見したときに、すごく相談しやすいです。私が高田高校にいた時、困りを抱えたお子さんがいて、その子は宇佐のお子さんでしたが、豊後高田の担当の方にお話をしたら、豊後高田から宇佐の担当課に繋いで下さって、解決がスムーズにいったことがありました。私は、困ったときだけではなく、日常的なつながり、また、市町村同士の繋ぎもしていけば上手くいくと思います。子どもに言っても、ヤングケアラーの場合は、「大丈夫です。」「保護者と離されるのが嫌。」と言う場合が多いです。自分はこれでいいと。それでも、学校は行政と話をして、その子のために何ができるかを考えることが必要なので、行政と学校が日常的に話し合える体制ができれば、もっとスムーズに相談できるかと思います。

○広瀬知事 今のお話、どうですか？

○こども・家庭支援課長 各学校全てと繋がることは難しいかと思いますが、市町村では、通常、要保護児童対策地域協議会という関係機関を集めた会合を月に一回していて、その中で、支援が必要なお子さんを把握して、情報共有をするという取組をしています。市町村の担当職員で濃淡はあるかもしれませんが、組織的には、仕組みづくりはしています。ただ、なかなか解決しない事案が多いのも事実でございます。

○広瀬知事 発達が気になるお子さんもヤングケアラーも、対象を広げてやってもらえるといいかもしれないですね。要保護児童対策地域協議会で。引っ越すと、引っ越した先の市町村に連絡するようになっているんですか？

○こども・家庭支援課長 協議会の共同管理台帳に登録している児童については、連絡をするようにしています。

○広瀬知事 別府にもそういうのがありますよね？

○岩武委員 別府では、日常的に学校に来ることはありません。ただ、相談するとき、一般の校長先生は直ぐに行政機関に相談するより、市町村の教育委員会に相談するほうが、しやすいと思います。私も何かあったときは、別府市教育委員会に相談しています。別府市は教育委員会が直ぐに関係機関に繋いでくれます。「〇〇課に今から連絡して、〇〇課の職員から学校にすぐに連絡させますね。」と。それだけでもすごくやりやすいので、学校の先生が教育委員会を通じて市町村の担当課と繋がれるように、高校でも市町村の教育委員会に言えるというような、そういう体制があるだけでも全然違うと思います。別府市もよくやってくれています。

○広瀬知事 今度、こども家庭庁が出来たときも抜かりないようにしないといけないですね。ありがとうございます。もう一つは、不読率の問題です。

協議事項（２）子どもをめぐる諸課題：②不読率の改善について

○社会教育課長（資料に沿って説明）

○広瀬知事 子どもさんの読書が進むようにと。我々の不読率も気になるところですが。読み聞かせってありますが、子どもさんが大きくなったときの読書習慣とは関係ないのかな？

○社会教育課長 現在、概ね80%くらいの小学校で、読み聞かせ活動を行ってもらっています。読み聞かせをしていただくことで、その読んでもらう本に対する興味関心を高める効果はあると思います。ただ、その場で完結してしまう部分もあるかとは思っていますので、関連する本を紹介

介していただいて、次にこういう本をどう？とお話をしてもらっています。

○鈴木委員 4人の子どもの6か月健診のときに、絵本をいただいて、保健師さんから、本を読んで下さいという指導を受けました。子どもが小さい間は、夜寝る前に読み聞かせをしていましたが、それが将来の読書に結びついているかという点、4人のデータしかないんですが、あんまり関係ない気がします。活字に触れるとか、情報を得るということを目的に、子ども達はその本を手にとっているか微妙なところなんです。興味・関心がある本を手にとっている気がしています。例えば、飼っている犬の犬種を探したいから犬の図鑑を借りてくるとか、犬を題材にした物語を借りてくるとか。植物で珍しいものがあれば、図鑑を借りてきたり、その植物を使った昔話だったり、それに関連した本を借りてくるとか。特に男の子だとそういう傾向があります。中学生くらいになると、なかなか本を自分で借りて読むことがないので、学校で、読書の時間を作っていたりとか、図書館に行く時間を作っていたり、読む習慣を切らさないようにしてもらっています。高校生になってびっくりしたんですが、入学前にこの本を読んで、読書感想文を書いて下さいという課題がありました。夏は、読書感想文を書くので、この本のどれかを買ってくださいと封筒が渡されて、買いました。現場で何とかして本を読んで貰おうという取組をしているのは、保護者にも伝わってきます。では、保護者が家で本を読んでいるかという点、私も全然読んでいません。今の子どもはテレビも観なくて、スマートフォンでSNSをみたり、動画をみたりなので、なかなか活字を読もうという風になっていないので、学校の取組で何とか補っているような状況だと思います。

○林委員 読書の選択肢が増えていて、私たちが子どもの頃は何冊かの中から選んで、感想文を書けということで、それが嫌だったが、今は幅広く選ばれていて、その子どもの興味にあったものがある。そういう取組をして、子ども達が活字に違和感なく触れられる環境をつくるのが大事だと思います。どの本も、どんな種類であっても、作者は色々な思いを込めて作って

て、それぞれに良いところがあると思います。難しい小説ばかり読むということではなく、いろんな選択肢の中で選んで、興味関心を育てる取組はとても良いと思いました。今は、インターネットとかで調べるんでしょうけど、小学校のとき数学に興味があったが、難しいことをやろうとすると教科書に書いてないんです。図書館に行くと、何かそれらしい本があって、勉強した記憶があります。どこにどんな情報があって、どんな人がどんなことを書いているのか、選択肢を広げることはとても良いと思います。この「読書日記」の取組は良いと思います。

○高橋委員 昔は家にも、世界の名作選がありました。今はどこの家庭にもない。お母さんたちは、スマートフォンを渡すんですよ。この間、出張で都心の地下鉄に乗ったら、9割の人が椅子に座ってスマホをされていて。それも一つの弊害かなと。便利は便利だが、昔は泣いている子どもには本を読んでいた気がするんです。家に名作選があったのに、今は無いなあというのが今日この頃の感想です。

○広瀬知事 不読率対策先進県というのはありますか？

○社会教育課長 取組としては、学校図書館、公共図書館、または行政が協力してやっているんですが、調査はしているけれど非公表となっております。ただ、滋賀県は、かつてから不読率が低いと聞いております。大分県も平成の合併以降、全市町村に図書館や類似施設はあるんですが、滋賀県の場合は、古くから小さな行政区まで図書館があって、生活の中で図書館を使う頻度も高いというのが、現在のそういう状況につながっているのかなと感じているところです。

○広瀬知事 なかなか難しい問題だが、時間をかけて議論しましょう。時間になりましたが終わりでいいですか？ありがとうございました。

以上